

CONTENTS

Opening essay:
What is the Society-University Collaboration?
[*Shin Mizukoshi*]——i

Faculty Papers

The Current Myth of “Illness as Metaphor”: Referring to the Confessions
of the Cancerd Famous on the 1980s~2000s in Japan
[*Yuko Manabe*]——1

The Ideal Distance Between the Academia and the Mass Media Business
[*Tomoaki Ide*]——27

Refereed Papers

Discussions on Technology and Journalism in the Japanese Newspaper
World: A Review of the Technological Innovation Period from the Late
1950s to the 1960s
[*Koji Akagi*]——71

Case Study of Local Assembly’s Public Relations: Focusing on the Case of
Kuriyama Town Assembly
[*Masami Honda*]——85

Historical Formation of the Figurative Style in the Reader’s Column of
“Shojyo Sekai” and “Girl” Norm: Before Yoshiya Nobuko’s “Hanamonogatari”
[*Keiko Saga*]——101

The Spread of Amateurs’ Viewpoints and the Intention of Enlightening by
the Specialists: The Circumstances of Kabuki in 1960s
[*Takashi Katsuki*]——117

Exploring Chinese People’s Consciousness of the Senkaku Islands Issue
and the Analysis of the Information Sources: Based on the Survey
Conducted in Liaoning Province
[*Chen Song*]——133

Field Review

Ethics and Governance of Research Involving Human Subjects
[*Kaori Muto*]——153



情 報 学 研 究
JOURNAL OF INFORMATION STUDIES

学環

思考の環

社会連携ってなんだろう [水越 伸] — i

教員研究論文

「隠喩としての病い」の現在 [真鍋祐子] — 1
——有名人の「がん告白」に照らして——

アカデミアとマスコミ現場の距離感 [井出智明] — 27

査読研究論文

技術とジャーナリズムをめぐる新聞界の議論 [赤木孝次] — 71
——1950年代末から1960年代にかけての技術革新期の考察——

地方議会の広報活動に関する事例研究 [本田正美] — 85
——栗山町議会の事例を中心として——

『少女世界』読者投稿文にみる「美文」の出現と「少女」規範 [嵯峨景子] — 101
——吉屋信子『花物語』以前の文章表現をめぐって——

伝統芸能にみる非専門家的視線の拡大と専門家の「教育」志向 [香月孝史] — 117
——1960年代の歌舞伎を事例として——

尖閣諸島問題に対する中国民衆意識の実態と情報源に関する一考察 [陳 嵩] — 133
——遼寧省における調査を基礎として——

フィールド・レビュー

人を対象とした研究の倫理とガバナンス [武藤香織] — 153



思考の環

OPENING ESSAY

社会連携ってなんだろう

数年にわたって文京区の生涯教育プラン（文京区アカデミー推進計画）を練り上げる会合の委員をやってきた。この間、地域のさまざまな関係者と話す機会を得ることによって、文京区の人々が東京大学に対して持つ、えもいわれぬ複雑な感情、愛憎なかばする気持ちが少しわかかってきた気がする。すなわち日本のトップ大学が地元にあるという誇りや、三四郎池、銀杏並木への愛着がある一方で、塙で囲われたやたら大きな敷地を占めていて、地域のイベントなどにはほとんど顔を出さず、なんだか権威的で一般人をバカにしているような感じがするという印象を持つ人は多い。ましてマスメディアに映し出される東京大学は、世界的な発明や発見のニュースと時々ある不祥事報道、と極端でバラバラな断片的イメージから成り立っていて、地域住民にはどうにも近寄りがたい。

はたしてこうした地域の人々が抱く東京大学のイメージに、キャンパス内の何人が気づいているだろうか。そしてそうしたことと自分たちの研究や教育活動を結びつけて、大学とこの地域社会のゆくえを考えているだろうか。正直に言って、これまで僕にはそうした観点がほとんどなかった。

■産学連携とのかかわり

最近の大学では社会連携がよく語られるようになってきた。僕は大学とメディア、地域社会の協働によって新たなメディアの生態系をつくり、多様なコミュニケーションの場や回路をデ

ザインする実践的なメディア論に取り組んできた。また情報学環は、もともと学問の「智慧の環」と同様に「社会の環」づくりを提唱してきた組織だった。そして冒頭の文京区の委員である。そうしたなかで、僕はしばしば社会連携という言葉の意味をしばしば考えるようになってきた。

社会連携とはなんだろうか。さしあたり次の二つのことはいえると思う。

第一に、社会連携というのは産学連携とか、産官学連携を包み込む概念として位置づけられるべきだということだ（以下、とりあえず産学連携だけに焦点をあてる）。これまで大学の組織や研究者が外部と連携するというと、工学系が企業と共同して研究開発をおこなうといった活動が典型的だった。そうした産学連携の起源は、日本における近代的な大学、とくに工学系学問の起源とほぼ重なるらしい。その後、大学でさかんになった学生運動は、大学の学問が企業や資本と連携することを癒着として厳しく糾弾した。この間の経緯は興味深いがここでは論じない。ただ、いわゆる産学連携、産官学連携などが日本でさかんに語られ、大学人が大手を振ってそういうことができるようになったのは1990年代以降のことだ。わずか20～30年のあいだに産学連携のとらえ方に180度といってよい変化が起きたという歴史的経緯は、忘れるべきではないだろう。

いずれにしても企業は社会のなかに埋め込まれて存在している。産業経済は社会の大きな部

分を占めはするものの、家庭生活、友だちのネットワーク、学校や社会教育活動、趣味や娯楽の活動、地域社会などといったその他の社会領域がたがいに結びつき、重なり合う社会全体の部分として位置づいている。いかえればパブリックな、あるいはコミユナルな社会空間と関わるかたちでビジネスの、あるいはコマース的な社会空間は成り立っているのだ。

また、企業組織がたんなる利潤追求のためのマシンではないことは、たとえば中原淳の最近の仕事（『職場学習論』東京大学出版会、2010年）をみればはっきりとわかる。企業で働く人々もやりがいやアイデンティティをもとめ、仕事のおもしろさ、ビジネスのなかの学びを欲している。大学が連携する相手の産業界は、まさに社会の一部なのであり、産業と社会が切り裂かれていることが日本経済の根本問題の一つだといっても大げさではないはずなのである。

すなわち、産学連携は社会連携のなかに包み込まれており、より具体的に眺めるならば両者はたがいに重なり合ったり、入り交じり合ったりしている。

■ 貢献・循環・共創

第二に、社会連携を一枚岩としてとらえるのではなく、いくつかの次元や段階のある、多面的な営みとしてとらえることが有効だという点である。ふつう社会連携といえは、公開講座や出前授業、学園祭への地元企業の参加、アウトリーチ活動やサービス・ラーニングなどいろいろなことがらが思い出される。僕はそれらをさしあたり、次の三つに分けてとらえてみるとよ

いのではないかと考えている。

・ 社会貢献 (contribution)

大学の知を社会に還元し、貢献する活動。大学の知識や知恵を一般の人々にわかりやすく紹介する公開講座や出前授業などはこれにあたる。

・ 社会循環 (circulation)

大学と社会のディスコミュニケーションを解消する活動。両者のコミュニケーションをめぐるメディア・リテラシーを育み、対話の回路を生みだす。

・ 社会共創 (co-generation)

大学と社会が協働し、新たなことがらを生みだす活動。研究者や学生が、その大学のある地域の課題に取り組み、新しい価値やしくみ、システムを社会とともに創造する。

二点、説明をしておこう。まず、「社会貢献」「社会循環」「社会共創」は深く相関しつつ成り立っている。公開講座の講師と参加者が地域問題をめぐる自主的な勉強会を始め、相互に理解し合い、新たな活動を展開していくということは、たとえば内田義彦のような市民社会派の社会学者たちが戦後、営々としてやってきたことだった。そのプロセスにはこれら三つの営みがすべて含まれていたのである。

次に、社会連携というときに大学中心主義、もっといえば大学ご都合主義ではダメだということだ。大学のむずかしい学問をあまり教養のない一般の人々にかみ砕いてわかりやすく教える。そういう活動でもないよりはマシだし、たとえば安田講堂で東大のえらい先生のお話を聞くことで満足されるシニア世代は少なくない。ただ、それに留まっていると発展性はない。さ

しあたりのスタートとして、大学の知を社会に還元し、一般の人々とふれあうことから始めるのはよい。しかし僕たちはつねに、大学というのがともすれば権威主義的、独善的になりがちなところであり、僕たち個々人に邪念はなくとも研究には権力性がつきまとうもののだということ忘れてはなるまい。そのうえで、社会との循環を回復（あるいは創造）するためのメディア・リテラシーを身につけること、一般の人々や組織と研究者や学生が対決し、対話を重ね、大学だけには生みだすことができない新たな価値やしくみを生みだすこと。そうしたことまでを射程に入れる必要があるだろう。

かつての日本の学生運動は、大学を象牙の塔から市民社会に解放された知の広場にすることを目指した時期もあった。学生運動に山のように問題があったことは承知しているが、しかしあのころ叫ばれたことがらをすべて忘れて、大学の生き残りのためだけに産学連携の延長上に社会連携を位置づけ、トップダウン式で市民と接するというのではダメではないか。僕たちはたえず、研究という営みがはらみうる政治性への批判と、大学というシステムへの批判と、そして地域社会が持つ問題に対する批判を踏まえつつ、自らが揺さぶられるようなかたちで社会と関わっていく必要があるのだと思う。

■まずはメディア実践から

理念的な話が続いてしまった。僕は仲間とともに、2011年から文京区での社会連携活動を本格化する。これは、JST CREST研究「メディア・エキスプリモ」の一環であり、原島博らが始めた「文の京・大いなる学び」という文京区と東京大学の連携事業の発展版でもある。鳥海希世子を中心とするメンバーは、文京区役所、ケーブルテレビ、自治会、数々のサークル、地域のお祭り関係者らと連携し、大学関係者を含む文京区に集う人々に「あいうえお画文」という一種のメディア遊びをやらせながら、地域に根ざしたメディアの生態系づくりをゆっくりスタートさせつつある。そこでの具体的な社会連携を通じて、僕たちは批判的で実践的なメディア論を進めていきたいと考えている。いうまでもなくこれは「社会共創」を目指しつつ、随所に「社会貢献」を埋め込み、「社会循環」を生みだそうとする、僕たちなりの社会連携の営みである。これがうまくいけばいいけれど、うまくいかなかったとしても、その過程で学べることは多いはずだと思っている。研究者や学生にとっても、地域のさまざまな人々にとっても、である。



水越 伸 (みずこし・しん)

1963年生まれ。東京大学大学院情報学環・教授

【専攻領域】メディア論

【主な著書】

『21世紀メディア論』（放送大学教育振興会、2011年）『メディア・ビオトープ：メディアの生態系をデザインする』（紀伊國屋書店、2005年）『新版デジタル・メディア社会』（岩波書店、2002年）『メディアの生成：アメリカ・ラジオの動態史』（同文館出版、1993年）など。

【所属学会】ICA、IAMCR、日本マス・コミュニケーション学会、MELL Platzなど

【ウェブサイト】<http://www.mediabiotope.com/>